

盛砂

丁寧に盛りあげられた白い花崗岩の砂の山は盛砂（もりずな）と呼ばれ、文字通り「砂の山」を意味する。これは江戸時代（1603～1867）に天皇の使者が真後ろにある勅使門を通して永観堂に出入りするときに足を清めるためにここに作られた。門の両側の軒下木鼻に、一対の獏が簡素に彫られている。架空の動物の獏は象のような鼻と牙を持ち、悪い夢や不運を追い払うと言われている。

人目を惹く市松模様の永観堂の横長の盛砂は珍しいものでもあり、もっと大きな文化的慣習の一部としても存在している。この盛砂の歴史はわずか2世紀に過ぎないが、日本では儀式のお清めのために砂を積む習慣は室町時代（1336–1573）にまでさかのぼることができる。このような盛砂の山は、他の寺院にもみられる。最も有名なのは、北東約6 kmにある上賀茂神社（かみがもじんじゃ）である。神社の鳥居をくぐると、細殿（ほそどの）の前に2つの盛砂がある。

これらの盛砂は神山を表している。神社にお住いの神が天から最初に降り立ったのが神山（こうやま）である。この二つの盛砂の形状は、天皇や大名など高位の人の輿（こし）での訪問の到着に備えて、伝統的に拝殿や神社の前に設置されていた。輿のくびき（横木）は、これらの二つの盛砂で降ろされ、お乗りの方は降りることができた。

立砂（たてずな）の慣習は独立しているようだが、神社または新しい建物の玄関前に砂や塩を盛る盛砂で悪魔を追い払う意味もある。さらに、京都府と神奈川県では、故人や祖先を迎えるお盆にあの世から故人の霊をお迎えする方法として立砂をする習慣がある。

盛砂は、雨や風に壊されたとき熊手で砂をかき集め、寺の侍者によって忠実に保たれている。白砂は、頭上の月の光を反射させるために選ばれたと言われている。電気照明ができる前の時代、この反射した月光は僧侶たちが勉強するのに十分明るかったのであろう。